「帰り道」における読みの交流を促す問いの提案

上越教育大学教職大学院・院生　浦　部　　永　遠

１　問題の所在

小学校第６学年の文学教材として、森絵都作「帰り道」がある。令和２年度版教科書から光村図書において採用された新教材であり、教科書のための書下ろしである。

本作品は、巧みな情景描写によって登場人物の心情が描かれていることが特徴的な作品だ。また、同じ場面について「律」の視点で語られる「1」と「周也」の視点で語られる「2」で構成されていることによって、それぞれの情景描写を比較しながら登場人物の人物像を捉えることができる作品となっている。そこで本研究では、本作品が「1」と「2」による二部構成であることを活かしながら、情景描写について問うことを軸とした学習デザインを提案したい。

小学校学習指導要領(平成 29 年告示)国語編では、第５学年・第６学年において「イ　登場人物の相互関係や心情などについて，描写を基に捉えること。」や「エ　人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり，表現の効果を考えたりすること。」が指導事項として挙げられている。このことから、本作品の学習をデザインするにあたって、情景描写について問うことを軸とし、人物像を想像させるような授業を展開していくことは適切であると考えられる。

情景描写について松本(2022：4，7)は、大森(1998)の「有情の世界」論を踏まえ、まず「情景はことのはじめから情景として「私」に立ち現れている」としている。さらに、情景描写を読み、その意味を考えるということは、「情景描写を読む際に立ち現れる読み手「私(の想像する作中人物)」の情景にある光景と感情を便宜上分け、感情を説明するという作業」だと述べている。そして、情景描写をめぐる学習に求められているものというのは、「コミュニケーションを通した言語実践」、学習者自身が「それぞれの私に立ち現れる情景を語り合う試み」を続けることであるとしている。本研究においても、本作品に使われている情景描写について、学習者それぞれが想像する登場人物に立ち現れる情景を語り合う機会として、情景描写についての問いをもとにした読みの交流を実践していきたい。

２　研究の目的

本研究の目的は情景描写についての問いを案出し､その問いによる読みの交流を通して、対象者である大学院生に読みの交流が成立するかを分析・考察することである。また、その結果から考えられるアナザーアプローチについても検討する。

３　研究の方法

本研究は、下記のようなプロセスをとる。

①本作品の情景描写について、読みの交流を促す問いを案出する。

・松本（2010：77）の読みの交流を促す〈問い〉の５つの要件に照らして、問いを考案する。
②その問いをもとに大学院生を対象とした読みの交流を実施し、交流の際の発話をＩ.Ｃレコーダーで録音する。
③発話をトランスクライブして発話プロトコルとし、読みの交流が成立したかどうかについて質的三層分析によって分析・考察する。
④その結果を踏まえたアナザーアプローチについて考案する。

４　教材について

本作品は、「律と周也が天気雨をきっかけにして仲直りする」という二人の成長物語として読めるが、それ以上に深いテーマが描かれているということを主張したい。そこで稿者の考える本作品のテーマは、「言葉」や「言葉にすること」についてである。

「言葉にすること」について、律は「思っていることを言葉にすることができないこと」、周也は「「ピンポンの壁打ち」になってしまい、「会話のキャッチボール」ができないこと」に悩んでいる。二人とも方向性は異なるが、同じ「言葉」について悩んでいるのである。そして、この悩みは二人の「言葉」に対する思いによるものであり、本作品は二人の「言葉」に対する思いの変容をめぐる物語だといえる。学習者がこのテーマを意識しながら読むことで、本研究で扱う情景描写についての問いをもとにした解釈もより深い内容となるはずだ。

４．１　最終場面の情景描写について問う意味

作中の情景描写の中から特に本研究で扱いたいのは、最終場面での次のテクストである。律と周也の「言葉」に対する思いに着目することを促すポイントとなる場面である。

それは、「1」での「ぬれた地面にさっきよりも軽快な足音をきざんで、ぼくたちはまた歩きだした。」と、「2」での「しめった土のにおいがただようトンネルを律と並んで再び歩きだし」である。律と周也は、同じ時間に同じ風景を見ているにも関わらず、「1」ではこの場面の風景を「ぬれた地面」と、「2」では「しめった土のにおいがただようトンネル」と描写している。このように「1」と「2」で使われている情景描写が異なるのは、この場面での律と周也には異なる情景が立ち現れているからである。

松本(2022：5)は、情景が立ち現れている主体について、「情景描写に反応して読み手に立ち現れる情景は、読み手という「私」に位置づけられつつも、複数の作中人物や語り手に立ち現れているであろう情景として、読み手それぞれに異なる情景を読んでいる」と述べている。多くの文学作品では松本のいうように、情景が立ち現れる主体については複数の登場人物や語り手など、多様に捉えられる。したがって、情景描写について問うときには「誰のどんな心情が表れているか。」と問うことが考えられる。しかし本作品は、同じ場面・状況について、違う語り手がそれぞれの語り方で語るという書き手の意図が自明であることから、読み手は語り手を固定的に読む可能性が高く、描出表現が描出表現として機能しない。そのため、「誰の」を問うまでもないだろう。そして、「１」と「２」の情景描写を比較することで、それぞれの情景描写に立ち現れる律または周也の心情とその背景にある「言葉」に対する思いを読むことができると考える。本研究では、それぞれの情景描写の意味を考えることで、作中の出来事を経験した二人の「言葉」に対する思いを読み取

り、人物像を具体的に想像することを促したい。特に、指定するテクストは最終場面の情景描写であることから、物語全体を通して一貫した解釈を形成しながら説明することが求められる場面だと考えられる。

４．２　律の「言葉」に対する思い

律の「言葉」に対する思いについて、帰り道・天気雨・天気雨の後という 3 つの場面に分けて作中の情景描写と関連させながら述べる。なお、ここで述べる解釈はあくまでも一例であり、多様な解釈があり得るものである。

４．２．１　帰り道

帰り道の場面で着目したいのは、「五月の空はまだ明るく、グラウンドに舞う砂ぼこりを西日がこがね色に照らしていた。」という情景描写である。「五月の空はまだ明るく」からは、周也に「どっちも好きってのは、どっちも好きじゃないのと、いっしょじゃないの。」と言われた昼休みの出来事を引きずっている律の感情とは裏腹に空は明るいということが、いつも通りに明るく接してくる周也への律のもどかしい気持ちを思わせる。二人の様子が対比されていることによって、周也は思っていることを言葉にできないなどと自分のように「言葉」について悩むようなことはないだろうと律は思っているということが想像できる。「2」を読むと実際はそうではなく、周也も「言葉」について悩んでいるということが分かることから、「砂ぼこりを西日がこがね色に照らしていた。」は、「西日」という明るくも薄暗い太陽が、「砂ぼこり」が象徴する二人の間のわだかまりを照らしていると読み手に想像させる表現となっている。

その後は昼休みの場面の回想があり、律は黙って歩きながら、周也との「頭の位置」や「足どり」の差にまで劣等感を抱き、落ち込みを増していく。そして、「「こんな」をうまく言葉にできたなら、周也とちゃんとかたを並べて、歩いていけるのかな。」と「「どっちも好き」と「どっちも好きじゃない」がいっしょなら、「言えなかったこと」と「なかったこと」もいっしょになっちゃうのかな。」という律の「言葉」に対する思いを象徴する言葉が、律の心内語として語られる。これらのテクストから、律が周也に引け目を感じているということや「こんなところが好きだ。」と言葉にできないなら、「好き」という思いが初めからなかった場合と同じになるのではないかと思っていることが分かる。

４．２．２　天気雨

天気雨の場面で着目したいのは、「空一面からシャワーの水がふってきた。」と「公園の新緑がふりまく初夏のにおい」である。天気雨の場面は、周也の言葉によって生まれた律の「みぞおちの異物」が消えてくる場面である。「みぞおちの異物」として表現されているものは、思っていることを言葉にできないという「言葉についての悩み」や「周也への劣等感」などであろう。また、「シャワー」や「公園の新緑がふりまく初夏のにおい」という描写からは、すっきりとすがすがしい律の心情を思わせる。笑い合った後に「単純すぎる自分がはずかしくなった」とあることから、「みぞおちの異物」が洗い流されながら笑い合っているときの律は、素直で飾っていない自然体のように見える。周也は自然体の律を受容し一緒に笑い合ってくれたことから、律は思っていることを上手く伝えられない自分でもそのままの自然体でよいと肯定されたように感じたのかもしれない。

天気雨の場面でもう一つ着目したいのは、「アスファルトの水たまりに西日の反射がき

らきら光る。」である。ここは、水たまりに映った西日が後押しとなって「ぼく、晴れが好きだけど、たまには雨も好きだ。」「ほんとに両方、好きなんだ。」と周也に伝えることができたという場面だ。「西日」「きらきら」という晴れのイメージのあるものと「水たまり」という雨のイメージのあるものが同時に見えた時に、晴れでも雨でもない曖昧さを感じ取り、その台詞を言うことができたであろうことが想像できる。また、「西日」は、帰り道の場面でも使用されている言葉であり、それぞれの場面での律の心情に合わせて、初めは「西日」の薄暗いイメージが強く表れていたが、ここでは明るいイメージが強く表れている。

４．２．３　天気雨の後

天気雨の後の場面で着目したいのは、「ぬれた地面にさっきよりも軽快な足音をきざんで、ぼくたちはまた歩きだした。」である。これは本研究で問いとするテクストであり、作中の出来事を経験した後の律の「言葉」に対する思いや心情が表現されている。

まず「ぬれた地面」というのは、天気雨が上がった後のアスファルトを指している。「アスファルトの水たまりに西日の反射がきらきら光る。」と描写されていた時のように、おそらくしっとりと濡れた地面のところどころに水たまりがあり、それに西日が反射してきらきらと光っている様子が律には見えている。

また「さっきよりも軽快な足音をきざんで」からは、天気雨が降る前と比べて、気分が軽くなっていることが伝わってくる。気分が軽くなったのは、「こんなところが好きだ。」とははっきり言えなかったものの、周也に「分かってもらえた気がした。」とその思いが伝わったと自覚しているからである。思っていることを言葉にできないということに悩んでいた律だからこそ「だまってうなずくだけ」しかできなかった周也の気持ちが理解することができただろうし、自分の思いが伝わったと感じることができたのだろう。

このように、「言葉」というのは、思っていることをはっきりと口にできなければ、なかったものになるという捉え方から、「こんなところが好きだ。」とはっきりと言えなくても、素直な気持ちで自分なりの言葉を伝えれば、自分の思いを分かってもらえることもあるという捉え方へと変容したことが、律の情景描写からは読み取れる。

「1」については、「思っていることを言えなかった律から、思っていることを言えた律へ」という変容を理解しやすい展開となっている。そのため、最終場面の情景描写についても、すっきりした気持ちが表れている、などの解釈に留まってしまい、再読が起こらない可能性がある。律の心情や「言葉」に対する思いが読み取れる情景描写に着目することで、より深い解釈が可能になるはずだ。

４．３　周也の「言葉」に対する思い

「2」は、「1」と比べると情景描写が少なく、周也の心内語で語られている部分が多い。しかし、天気雨の場面からは情景描写が増えるという特徴がある。周也の「言葉」に対する思いの変容について、情景描写をもとに分析していきたい。なお、ここで述べる解釈はあくまでも一例であり、多様な解釈があり得るものである。

４．３．１　天気雨

「2」の情景描写で特徴的なのは、天気雨の場面での「空からじゃんじゃん降ってくるそれが、ぼくの目には一しゅん、無数の白い球みたいにうつった」である。また、直後の段落で「無数の白い球」を「ぼくがむだに放ってきた球の逆襲。」と表現している。ここは、

周也が今まで行ってきた会話を象徴する場面である。
　周也が今まで行ってきた会話は、軽い言葉を次々に発してしまうものだった。周也の母親が言うにはそれは「ピンポンの壁打ち」で、周也は「相手の言葉を受け止めて、それをきちんと投げ返す」という「会話のキャッチボール」をしたいと思うようになる。そして、周也は律が返してくれるような無駄打ちではない「いい球」を投げなくてはならないと思い込んでしまうのである。
　しかし、「いい球」を投げようと思うも言葉が見つからず、焦りながら歩いているところに天気雨が降ってくる。そこで、上述の情景描写が登場する。ピンポン球のことを考えていた周也には、雨粒がピンポン球に見え、さらに「逆襲」されるように感じている。「球の逆襲」が象徴するものとは、周也の「ピンポンの壁打ち」を受け止めていた律の気持ちや、言葉にできていなかった律からの返答などが想像できるだろう。

４．３．２　天気雨の後

　天気雨に降られながら律と笑い合った後の場面では、周也は律の「ぼく、晴れが好きだけど、たまには雨も好きだ。ほんとに両方、好きなんだ。」という言葉に対して、「いい球」を投げそこない、「だまってうなずくだけ」しかできなかった。そのような出来事の後に、「しめった土のにおいがただようトンネルを律と並んで再び歩きだし」という情景描写がある。これは本研究で問いとするテクストであり、作中の出来事を経験した後の周也の「言葉」に対する思いや心情が表現されている。
　まず「しめった土のにおいがただようトンネル」というのは、「1」の「ぬれた地面」と同じアスファルトを指すものである。しかし、律には気付くことができなかった「しめった土のにおい」に気付き、「トンネル」にも注目している。周也が「しめった土のにおい」を感じ取っているのは、この時に抱いている感情が、律の感じているようなすがすがしさや、心が通じ合えたという喜びだけではないからである。「1」には無い「ひょっとして――と、ぼくは思った。」からの語りがあることで、周也だけが抱いている感情があるということが想像できる。例えば、「会話のキャッチボール」とは「いい球」を投げることではなく「相手の言葉を受け止める」ことから始まるということに気付き始めていたり、律の言葉を本当に受け止められたのか分からないという半信半疑な気持ちを抱いていたりすることなどが挙げられるだろう。これらの複雑な気持ちが、「しめった土のにおい」には表れている。
　また、「トンネル」に注目することでも、周也の「言葉」に対する思いを読み取ることができる。例えば、今までは静けさが苦手だった「緑のトンネル」でも「律と並んで」歩くことができるようになっていることから、沈黙を気にすることがなくなったのかもしれない。また、一般的に「トンネル」というのは中が暗くなっているが、必ず明るい出口に繋がっているものである。今はまだ半信半疑な気持ちを抱いているかもしれないが、いつかはその半信半疑な気持ちも晴れるかもしれないと思っている周也の気持ちが表れているとも解釈することができる。
　このように、自らの「言葉」を「ピンポンの壁打ち」と捉え、律が返してくれるような「いい球」を投げて「会話のキャッチボール」をしたいと考えていた周也が、「いい球」は投げそこなったけれど律の言葉を受け止めることができた経験から、「会話のキャッチボール」とは、まず「相手の言葉を受け止める」ことから始まるということに気付くという「言葉」に対する思いの変容を情景描写から読み取ることができる。特に「2」の最終場面

の情景描写は多様な解釈が可能になるものであることから、学習者に自らの解釈を交流させる必然性のある場面だと考えられる。

５　問いの検討

本作品で扱う情景描写についての問いを、松本（2010：77）の読みの交流を促す〈問い〉の５つの要件に照らして検討する。

問い：「1」の「ぬれた地面にさっきよりも軽快な足音をきざんで、ぼくたちはまた歩きだした。」と「2」の「しめった土のにおいがただようトンネルを律と並んで再び歩きだし」は、同じ場面のことを語っていますが、表現が異なります。このような表現の違いがあるのはなぜだと思いますか。

要件	要件の充足	理由
a　表層への着目	○	「1」と「2」で表現の異なる本作品の最終場面での情景描写に着目させており、表現上の特徴に着目する問いになっている。
b　部分テクストへの着目	○	最終場面の情景描写に限定した問いであり、読みのリソースの共有がなされている。
c　一貫性方略の共有	○	作中の出来事を経験した後の登場人物の心情が表れている描写であるため、「1」と「2」を合わせて読みながら、物語の全体像や場面の移り変わりに応じた登場人物の心情の変化を捉えることになり、一貫した説明が可能になる。
d　読みの多様性の保障	○	どのテクストを根拠にするかということや律と周也の「言葉」に対する思いの変容をどのように解釈するかによって多様な読みが可能になる。
e　テクストの本質への着目	○	作中の出来事を通して律と周也が自らの「言葉」に対する思いを見つめ直している場面であり、その時の心情が描かれている「1」と「2」の情景描写の違いについて考えることで、本作品のテーマに迫ることができる。

６　活動の実際

読みの交流の活動の実際は次の通りである。

(1) 対象：上越教育大学教職大学院　大学院生８名（全２班）
　※教職大学院プロフェッショナル科目「国語科学習デザイン論」履修者

(2) 読みの交流の展開

過程	活動内容
導入 (15 分)	○二人の悩みについて確認する。 ○全文を読む。
展開 (1 時間 5 分)	○読みの交流をする。 問い①：「なのに、分かってもらえた気がした。」とありますが、何を分かってもらえたのでしょうか。また、なぜ分かってもらえたと思ったのでしょうか。 問い②：「ひょっとして――と、ぼくは思った。」とありますが、「――」にはどのような言葉が入るでしょうか。

	問い③:「1」の「ぬれた地面にさっきよりも軽快な足音をきざんで、ぼくたちはまた歩きだした。」と「2」の「しめった土のにおいがただようトンネルを律と並んで再び歩きだし」は、同じ場面のことを語っていますが、表現が異なります。このような表現の違いがあるのはなぜだと思いますか。
まとめ (5 分)	○小学校第 6 学年を学習者とした場合のアプローチについて考える。

７　読みの交流の分析

本研究では、情景描写についての問いである、問い③で読みの交流が成立したかどうかについて、活動中のプロトコルデータをもとに質的三層分析によって分析する。質的三層分析は松本（2004）によって考案された分析方法であり、「意味内容」「発話機能」「形式的特徴」の三層から分析するものである。なお、「意味内容」の分析において松本(2020：135)は「メタ認知的変容が認められた場合に読みの交流が成立したとみなす。」と述べている。また、メタ認知的変容は「自分自身や他の学習者の読みについて，それを比較したり相対化したりする言及や，読み方などメタ認知に関する言及」があることで認められるとしている。

また、情景描写の意味を考えることで、二人の「言葉」に対する思いへの言及を促すことができているのかという点においても分析していきたい。

７．１　１班の分析

７．１．１　自分と他者の読みを比較したり相対化したりする言及

［発話プロトコル 1］Ms、Ha

526Ms　周也はなんかまだなんか疑問とか、／／を抱えている？((中略))そういうのがあって「しめった土のにおい」／／っていう表現をしたのかなって思いました。

((中略))

535Ha　その周也がまだ迷ってるっていうのは同じなんですけど／／なんか着目したのが「しめった土のにおい」の方じゃなくて、「トンネル」の方になんか着目して

1 班では、「2」の情景描写に表れている周也の心情について、自分と他者の読みを比較したり相対化したりする言及が見られた。535Ha は、Ms と自分自身の読みを相対化させた説明をしている。「2」の情景描写について 526Ms は、周也に迷いの心情があるということを「しめった土のにおい」から想像しているが、535Ha は「トンネル」を想像したと述べている。また、Ha も Ms もこの場面での周也の心情は、言葉を受け止めるとはどういうことなのかということについて迷っているという似た解釈をしているが、Ha はその心情が表現されていると捉えた描写が Ms と異なるということをメタ認知している。

７．１．２　読み方などメタ認知に関する言及

［発話プロトコル 2］Ha、Ta、Nt

570Ta　これ、この問いだとなんか全体が関係してきますよね。

571Nt　う：：ん。

572Ha　そうですね。

573Ta　それはすごくすんなり。なんか「トンネル」、「トンネル」の対比も出てきたし。

1 班では、570Ta による結束性方略に関する言及が見られた。これは、問いに対する読みを一人ずつ輪番で発表した後の発話である。自分や他者の解釈は作中のテクストを根拠に一貫した読みが作られており、今回の問いは結束性方略を用いて説明することが促されている問いであったということを自覚していると考えられる。特に 573Ta の発話は 535Ha([発話プロトコル 1] で引用)や 553Nt(最終場面での「トンネル」には、出口は見えているもののまだ模索しているところがある周也の心情が表れているとする読み)の「トンネル」に着目する解釈を聞いたことで、「2」の帰り道の場面での「緑のトンネル」と最終場面での「しめった土のにおいがただようトンネル」はそれぞれ連想されるイメージが異なるということに気付き、読みを深めていることが分かる。

７．１．３　律の「言葉」に対する思いへの言及

［発話プロトコル 3］Ms、Ha、Ta、Nt

526Ms　僕はなんか、そのまず律はもうすっきりしてるのかなっていうか、／／やっぱその「軽快な足音」があって、

((中略))

535Ha　私もなんか、律が晴れやか

((中略))

543Ta　律は、と、言われた通り軽快、「さっきより軽快」っていうので、すっきり言えたとか、「分かってもらえた」という言葉もあるので、そうかなって。

553Nt　律はやっぱり「みぞおちの異物」も消えてるし、／／ちょっと晴れやかになった気持ちから、こういった「軽快な足音をきざんで」っていう表現になったのかなと思いました。

((中略))

586Nt　律の方は最初距離／／感じてましたけど／／それが肩を並べて歩いて行ける／／みたいな。最後感じたのかなって。／／晴れやかさもありますよね。

((中略))

618Ta　でもやっぱ「みぞおち」って言ったじゃないですか。

619Nt　はい。

620Ta　ああ、確かにと思って。

621Nt　はい。

622Ta　そうだよね。やっぱりその律のすっきりさは／／触れられている感じか。

今回の問いに対して律の心情を語っている部分を抜粋したのが 526Ms、535Ha、543Ta、553Nt である。1 班では、全員がこの場面の律の心情をすっきりとした、晴れやかな気持ちと捉えている。しかし、律がそのように感じた根拠としてテクストを指定していたのは Ta と Nt だけだった。

律の「言葉」に対する思いに関しては、Nt が作中で描かれているものの一部について言及している。Nt は「「みぞおちの異物」が消えたこと」を根拠に律の心情を説明し、思っていることが言えない自分に劣等感を抱き、周也との距離を感じていた律の「みぞおちの異物」という劣等感が消え、周也と対等になった律の姿を想像することができている。

また、618Ta からの Ta と Nt の対話を通して、Ta は律がすっきりとした気持ちになった背景として、「みぞおちの異物」というキーワードがあることに気付くことができていることが分かる。

７．１．４　周也の「言葉」に対する思いへの言及

［発話プロトコル 4］Ms、Ha、Ta、Nt

526Ms　周也はなんかまだなんか疑問とか、／／を抱えている？／／それが、なんか不安とかっていうよりも、そのなんて言うんだろう、「ちゃんと受け止められたのかもしれない」みたいな／／疑心暗鬼じゃないですけど、なんかそういうのがあって「しめった土のにおい」／／っていう表現をしたのかなって思いました。

((中略))

535Ha　その周也がまだ迷ってるっていうのは同じなんですけど／／なんか着目したのが「しめった土のにおい」の方じゃなくて、「トンネル」の方になんか着目して、なんか緑のトンネルっていう表現を前に出てるんですけど、こうトンネルしか書いてないので、思い、ぱっと思い浮かんだのが、普通の、真っ黒、なん、真っ暗、山ん中掘ってあるトンネルを思い浮かべたんですけど、なんかそのトンネルって表現からまだ迷ってる部分が／／あって、本人はまだ正解が見えてないけど、／／まあ進む方向だけは分かったかな、分かってきたかな？みたいなイメージを持ちました。

((中略))

543Ta　私はなんか 1 個前の「ただよう」に着目して、なんか／／空間全体がそんな、なんか湿った／／みたいなって思って。プラス、「並んで」歩くっていうところに、なんかちょっともやもやしてるんだけど、近づけたのかなみたいな。「ひょっとして」かもしれないはやっぱりまだ考えてるみたいなところで。とか、 並んで歩いてない、最初、／／じゃないですか？なんか「にげるようにスピードを増していく」とか、「後ろをふり返ると」、とかこうなんかズレがあるのに、ここは「並んで」っていうところはまたちょっとまだ迷ってる部分を出すみたいな感じなのかなって。

((中略))

553Nt　周也の方はやっぱりまだちょっと気付きかけているけど、／／払拭しきれない、大分払拭しきれないところがあって、それこそえ：っと「土のにおいがただよう」みたいな／／表現が出ているのと、で、ちょっと長いトンネルの中にいる／／感覚。でも出口は見えてるけど、まだちょっと、あ、模索してるみたいな感じの心情が、この「トンネル」っていうところに繋がっているのかなという風に思いました。 以上です。

((中略))

643Ta　そう。ずっと悩んでる。

((中略))

646Ha　まあでも並んで？／／「並んで再び歩き出し」た、だから／／一応、そう。律との関係は？／／一応オッケーに、なってんのかな／／とは。

((中略))

652Ta　ちょっと希望が／／ありますよね。

653Nt　／／確かに。

654Ha　あ、でも本人がこの言葉のキャッチボールとかの部分でももやもやもや／／してるのかなって。

((中略))

659Ha　確かになんで「しめった土」と「ぬれた地面」って分けたんだろうなあ。

660Ta　う：ん。

661Ms　う：ん。

今回の問いに対して周也の心情を語っている部分を抜粋したのが 526Ms、535Ha、543Ta、553Nt である。1 班では、本当に律の言葉を受け止められたのかどうか分からず迷ってもやもやしている気持ちや、いつかはこの迷いが晴れるだろうという希望を抱いている気持ちと捉えている。引用しているテクストも様々で、周也の気持ちを自分なりに表現している。

1 班においては、周也の心情は捉えられているものの、その背景となる周也の「言葉」に対する思いが語られている言及はあまりなかった。一方で、今回の問いに向かう前に行った問い②「「ひょっとして――と、ぼくは思った。」とありますが、「――」にはどのような言葉が入るでしょうか。」では、周也の「言葉」に対する思いについて語られていた。そこでは、「――」に入る言葉として 324Ta「言葉は返せなかったけど、律の言葉を受け止められたのかな」、353Ms「お母さんの言ってる意味／／ってこういうことなんだ」、365Ha「「い

い球」に着目してたけど、／／あ、受け止めることも大事なんだ」、369Ha「これもなんか会話の１個なんだ」などと周也の「言葉」に対する思いを捉えることができていた。

659Ha の発話では、最終場面の情景描写と二人の心情を関係付けられていないことが予想される。本作品では律や周也の「言葉」に対する思いが様々な情景描写に表れている。最終場面でも「迷い」や「希望」という心情となって最終場面での情景描写に表れているということを認識した上で今回の問いについて話し合われていたとしたら、今回の問いにおいても周也の「言葉」に対する思いについて言及があったのかもしれない。

７．１．５　発話機能

Ha は全員の発表が終わった後に、566Ha「「ぬれた」と「しめった」ってなんだろうな。」という発話をしていた。新たな話題を提示している発話であり、律と周也の情景描写の意味について考えるきっかけとなった。しかし、それぞれの心情と情景描写が結びつかずに今一つ納得のいっていない様子で、659Ha が「確かになんで「しめった土」と「ぬれた地面」って分けたんだろうなあ。」([発話プロトコル４] で引用) と更なる交流を求めていた。律と周也の情景描写の意味について再度交流するきっかけとなり得る発話だったが、全員考え込んでしまい、対話にはなっていなかった。

７．１．６　形式的特徴

他者の発言中の相槌や「ありがとうございます。」などの返答が多く、温かい雰囲気での交流だった。

７．２　２班の分析

７．２．１　自分と他者の読みを比較したり相対化したりする言及

［発話プロトコル５］Iy、Ut

622Iy　確かに「トンネル」ちょっとあんま考えなかった。

623Ut　そういう意味ありますもんね。

624Iy 「しめった土のにおい」までしか考えなかった。トンネルって確かにそうだよね。

２班では、Iy が「トンネル」に言及した Ks の発話を受けて、Ks と自分自身の読みを相対化させた発話をしている。Iy は、Ks は自分にはない着眼点として「トンネル」というテクストを挙げているということを自覚しているのが分かる発話である。

７．２．２　読み方などメタ認知に関する言及

［発話プロトコル６］Mt

576Mt　そう。だからだったらもうこんなになんか若干暗いような表現する必要なくなっちゃうから。

((中略))

580Mt　静かなの良、が、別に良くなった／／んだったらこんな(残酷な)表現は／／いらない。

２班では、576Mt、580Mt による交流方略に関する言及が見られた。Mt は、最終場面の情景描写での「トンネル」の表現は暗く、「静けさが苦手だったトンネルを克服した周也」という人物像は適していないと述べている。これは、作者がこの情景描写に込めた意図を読

み取ろうとしているため、交流方略を用いているといえる。

７．２．３　律の「言葉」に対する思いへの言及

［発話プロトコル 7］Ks、Iy、Ut、Mt

548Iy　自分の思いを伝えるっていうミッションがクリアされたから、なんかもう理解してもらえて、すっきりしてる感じ？

((中略))

562Mt　さっきより気持ちが軽くなったから「軽快な足音」、「軽快な足音をきざんで」。

589Ks　言えたっていう吹っ切れた気持ちなので、まあ肩を並べられたっていう／／ど、どこだったっけ、34、4 行目ぐらい、肩を並べられるのに、みたいな／／で、並んで歩いてるっていう表現がやっぱり出てくるっていうのは、そういうのをこう、反映しているかな、っていう感じはしました。

((中略))

645Ut　律の意外と単純なところっていうのが、あるから、最初は「こんな」を言えれば良かったのに、とか言ってたくせに、最後「こんな」を言えてないことにも気付いてないっていう。(笑)

((中略))

661Iy　律の方はさあ、雨、天気雨の後にもうさ、なんて言うの、「アスファルトの水たまりに西日の反射が／／きらきら光る」とか書いてあって、／／もうそこですっきりしちゃって／／ねっていう感じの描写があるのね。

((中略))

693Ks　／／さっきの「こんな」を分からないのに／／っていうのでいくと、たん、単純だっていう風なこともそうだし、「こんな」を言わなくたって伝わるんだっていうことを。

((中略))

696Ks　「こんな」を言わなきゃ両方分かってもらえない。なんで僕、山と海好きなん、山こういうとこ好きで、海、こういうとこ好きだを言わないと、きっと／／分かってもらえないんだろう。なんだそれ、みたいな。

697Ut　／／うん。

698Ks　だけど、言わなくてもいいんだっていうか。

今回の問いに対して律の心情を語っていたのは、548Iy、562Mt、589Ks である。

Ks は、「思っていることが言えない自分は、周也と肩を並べて歩けない」と考えていた律が「不完全ながらも思っていることが言えたことで、周也と肩を並べて歩いていく自信が持てた」と考えられるようになった変容を捉えている。また、645Ut を受けての 693Ks の発話では、「どっちも好き」と言うことができたということに関して、律は「こんなところが好きだ。」と言うことができなくても伝わるということに気付いたという解釈もあることを提案している。これらの発話は、律の「言葉」に対する思いへの言及といえる。

また、Iy は、548Iy で律は「どっちも好き」と言えたことによってすっきりとしたと述べているが、661Iy では、「どっちも好き」と言う前の「アスファルトの水たまりに西日の反射がきらきら光る。」という情景描写からも律のすっきりとした気持ちを読み取っている。661Iy は、二人の心情は最終場面の情景描写から読み取ることができるか、という話題の中での発話であり、天気雨の場面と最終場面の情景描写を関連させて読んでいることが分かる。

７．２．４　周也の「言葉」に対する思いへの言及

［発話プロトコル 7］Ks、Iy、Ut、Mt

562Mt　周也自身がこの「緑のトンネル」を苦手としてる。から、そんなにこの場所自体にはそんなに、元々ここが苦手っていうの、も、が、なんだろう？場所が苦手っていうので、ま、「トンネル」このまま使われているのかなと思ったんですけど、／／「しめった土」。

563Iy　／／なぜ苦手かっていったら静かだから嫌いだったんだよね。
564Mt　うん。
565Iy　でも静かなのが、良しになった。
((中略))
569Iy　／／となるとさっき入ってくる言葉が。ね。あれは。(笑)
570Mt　ちょっと変わってくるな／／と思った
((中略))
580Mt　静かなの良、が、別に良くなった／／んだったらこんな(残酷な)表現は／／いらない。
((中略))
583Mt　もやっとしたのが残ってるのかな
((中略))
670Ut　これがやっぱ 2 人ともなんか解決している物語なのかどうなのかっていうところですよね。そのさっき、なんだっけ？お母さんの話？
671Iy　(笑)
672Ut　分かったっていう風に考えるとしたら周也も解決しているはずだから。
673Iy　そうだよね。終わりが中途半端なんだよね。なんか周也の方は。
((中略))
683Ks　なんか、でも受け止める方は 1 発ではなかなか解決しないけど、言わなきゃいけなかった人は、一個こう。＝
684Iy　＝クリア。
685Ks　クリアしたらもうなんか。
686Iy　分かりやすい。
687Ks　その差もあると思う。

2 班でも、周也の心情については 1 班と似たように本当に律の言葉を受け止められたのか半信半疑な気持ちでいるという解釈をしていた。また、2 班では、交流の中で周也の「言葉」に対する思いへの言及となる、「周也は「言葉」に対する悩みを解決したのか」という話題が上がった。

まずは、沈黙を恐れて「ピンポンの壁打ち」をしてしまっていた「緑のトンネル」についての周也の捉え方の変容について話し合われていた。Iy は、天気雨の後には沈黙を受け入れることができるようになり、静けさが苦手だった「トンネル」が平気になったはずだと解釈している。しかし、Mt はその解釈だと「しめった土のにおいがただようトンネル」というような暗いイメージのある描写にはならないはずだとし、静けさや沈黙が完全に良いものとなって解決してはいないと述べている。そこで、569Iy が話題にしているのは問い②への解釈についてである。問い②について Mt は、「――」に入る言葉は 225Mt「「会話のキャッチボール」ってこういうことか」を挙げている。さらにその理由として、「1」の終末は律の「言葉」に対する悩みが解決しているため、「2」の終末でも周也の悩みが解決した方が物語の終わり方が綺麗だからと述べている。そのため、問い③で「しめった土のにおいがただようトンネル」の意味を考えようとしたときに、周也の「言葉」に対する悩みが解決していると言い切れるような終末ではないことに気付いたのだと考えられる。この話題が 670Ut の発話へ繋がっていき、周也の感じている言葉を受け止めることの難しさを共有していた。

７．２．５　発話機能

2 班では、563Iy や 670Ut のように、相手の発話を受けて、自分の解釈との違いを確かめるような発話がよく見られた。このような発話によって、多様な解釈を共有しながら解釈を形成し直すことができていた。

７．２．６　形式的特徴

2 班は全員が輪番で発表してからフリートークになる形式ではなく、発表を聞きながら

質問をしたり自分の意見を述べたりしていたため活発な話し合いの雰囲気があった。

７．３　考察

今回の読みの交流ではどちらのグループでもメタ認知的変容が見られたため、この問いは読みの交流の成立を促す問いであるといえる。また、情景描写について問うことで、登場人物の心情を想像させ、人物像を捉えさせることもできた。しかし、最終場面の情景描写から律と周也の「言葉」に対する思いを読み取ることのできている発話はあまり見られなかった。つまり今回の問いは、読みの交流の成立を促す問いではあったが、必然的に本作品のテーマである「言葉」に対する思いを読み取ることのできる問いではなかったということが分かった。

ただ、「言葉」に対する思いについては、問い②「ひょっとして――と、ぼくは思った。」とありますが、「――」にはどのような言葉が入るでしょうか。」では、ほとんどの学習者が周也の「言葉」に対する思いに言及することができていた。さらに 2 班では、問い②で話し合ったことと最終場面の情景描写とを関係付けることで、情景描写から周也の「言葉」に対する思いについて読み取ろうとしている言及があった。

したがって、今回の問いをもとに律と周也の「言葉」に対する思いを読むためには、情景描写に表れている心情の背景に「言葉」に対する思いがあるということに気付き、情景描写と「言葉」に対する思いを関係付けるための手立てを加える必要があると考えられる。

８　結論

問いの検討や読みの交流の分析から、今回の問いで読みの交流が成立したと認定できる。しかし、最終場面の情景描写から律と周也の「言葉」に対する思いを読み取るためには、今回の問いだけでは不十分である。複数の問いの組み合わせによって、周也と律の「言葉」に対する思いについての解釈を形成したうえで、最終場面の情景描写に表れる心情と関係付けることを促す必要があると考えられる。

９　アナザーアプローチ

今回の問いに正対し、最終場面の情景描写から二人の「言葉」に対する思いを読み取るためには、二人が「言葉」についてどのように悩み、作中の出来事を経てその悩みがどのように変容したのかということを捉えておく必要がある。そのために、今回の問いの前に行いたい問いについて提案する。

律については、「「今だ」と思ったのはなぜでしょう。」という問いが適していると考えられる。この問いに向かう学習者は、おそらく天気雨の場面での「ざざっと水が降ってきて、何かを洗い流した。」や「アスファルトの水たまりに西日の反射がきらきら光る。」などの情景描写に着目するだろう。そして、天気雨に背中を押された理由を考えたときに、「みぞおちの異物」や「水たまりに映る西日の曖昧さ」などについて考え、律の「言葉」に対する思いを読み取る手がかりとなると考えられる。

周也については、本研究での問い②で行った「ひょっとして――と、ぼくは思った。」とありますが、「――」にはどのような言葉が入るでしょうか。」が適していると考えられる。この問いによって、周也が作中の出来事を経て、自分の「言葉」についてどのように考え

ているかを想像することが促される。律の「言葉」に対する思いを読み取る際に情景描写に着目して考えた経験を活かすことで、情景描写に表れる心情と「言葉」に対する思いを関係付けることができると考えられる。

注

プロトコル書式は松本(2015)に準ずる。記述の方法、記号については、以下の通りである。

＊記述の方法

・発話の単位は、間と内容（提題表現＋叙述表現）によって認定する。内容的に一連の発話は連続して記述する。

・発話には発話番号を付す。内容的形式的に一連の発話はひとまとまりとする。

・発話者をアルファベットで示す。

・漢字・平仮名・片仮名交じりで表記する。

＊記号

／／ 発話の重なり。直後の//のあとの発話が重なっている。

＝ 途切れのない発話のつながり。直後の＝のあとの発話がつながっている。

（ ） 聞き取り不能。中に記述のある場合は、聞き取りが不完全で確定できない内容。

（3） 3 秒の沈黙。

（.） 「、」で表記できないごく短い沈黙。

: : 直前の音がのびている。「：」がおよそ 0.5～1 秒の長さを示す。

― 直前の音が不完全なまま途切れている。

、 発話中の短い間。プロソディー上の何らかの区切りの表示を伴う。

？ 語尾の上昇。

。 陳述の区切り。語尾の下降などのプロソディー上の区切りの表示を伴う。

＿ 下線部の音の強調（音の大きさ）。

° ° 間の音が小さい。

(笑) 笑い声ないし笑いながらの発話。

（()）注記。

文献

大森荘蔵(1998)『大森荘蔵著作集』第 5 巻，岩波書店

佐藤綾花(2021)「二つの視点から読む物語の読み方、楽しみ方」『教育科学　国語教育』8 月号　明治図書

松本修(2004)「国語科研究における話し合いプロトコルの質的三層分析」『臨床教科教育学会誌』第 3 巻第 1 号　臨床教科教育学会

松本修(2010)「読みの交流を促す「問い」の条件」『臨床教科教育学会誌』第 10 巻第 1 号　臨床教科教育学会

松本修(2015)『読みの交流と言語活動 国語科学習デザインと実践』玉川大学出版

松本修・桃原千英子(2020)『中学校・高等学校国語科　その問いは、文学の授業をデザインする』明治図書出版

松本修(2022)「情景描写を〈読む〉ことの意味」『国語科学習デザイン』第 5 巻第 2 号(通巻 8 号) 国語科学習デザイン学会

光村図書(2020)『小学校国語　学習指導書　6 年』

光村図書(2020)『小学校　国語教育相談室』NO.192
文部科学省(2017)「小学校学習指導要領解説 国語編」